

令和 6 年 6 月 26 日現在

機関番号：32702

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13472

研究課題名（和文）南米コロンビアの都市避難先住民から見る「多文化主義」をめぐる人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological study of indigenous critique on multiculturalism: from the IDP-indigenous points of view

研究代表者

近藤 宏 (KONDO, Hiroshi)

神奈川大学・人間科学部・准教授

研究者番号：20706668

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,700,000円

研究成果の概要（和文）：コロンビア国内で国内避難民となった先住民たちは、被害者団体を組織している。その活動や、その団体に参加する人びとの暮らしには、コロンビアで広く見られる「同化」という発想、あるいは、特定の領土と文化を一体と見なす多文化主義的想像力の枠組には収まらない考え方を見出すことができる。同化の考え方では、都市に暮らすことは先住民的文化の「死」をもたらすきっかけとされる。ところが、国内避難民である先住民たちは、文化活動や、植物を利用したミクロな空間構築によって、なお先住民として生きている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コロンビア国内において、先住民が生地を追われ国内避難民となっている状況について、先住民自身が「可視化」のための活動を行なわねばならないほど、十分な研究の蓄積はない。本研究は、マイノリティのなかのマイナーな生き方に光をあてるという意義がある。同時に、権利をめぐる問いのなかで、特定の場所に生きる民としてイメージされやすい先住民を新たな角度からとらえ、そこに多文化主義的想像力への批判のきっかけを見つけている。この点は、移動を余儀なくされる人びとを「問題視」する考え方の問い直しを可能にする。

研究成果の概要（英文）：Internally displaced indigenous peoples within Colombia have organized themselves into victim organizations. In their activities and in their daily lives we find imaginations that do not fit within the framework of the widespread idea of "assimilation" in Colombia, or the multiculturalist imagination that sees a particular territory and culture as one. In the assimilation idea, living in the city is seen as a trigger for the "death" of indigenous culture. However, internally displaced indigenous peoples still live as indigenous peoples through cultural activities and through the construction of micro-spaces using plants.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：文化人類学

キーワード：先住民 国内避難民 多文化主義 コロンビア

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、内戦の影響によって避難民として暮らす先住民が組織する被害者団体の活動とそこにかかわる人びとの暮らしを考察の対象にする。2004年、コロンビアの憲法裁判所は、複数の先住民が「内戦のために物理的・文化的に絶滅への途上にある」という判決を下した(Auto 004/09)。その要因のひとつには、「強制的避難移住 *desplazamiento forzado*」があげられる。生地とは別の場所への移動が「文化的絶滅への途上にある」と判断されるのも、多文化主義的社会体制にあるコロンビアでは、先住民の文化的特性が特定の地理的領域との結びつきから育まれ維持されると考えられているからである。このような判断のもとにあるのは、「同化」を前提とする文化の考え方であり、そのため、都市部に暮らす先住民の存在はないがしろにされる傾向性があった。そのなか、ある地方都市で先住民たちは自らを紛争被害者として可視化するために、被害者団体を組織し、活動をはじめた。その活動からは、コロンビア社会におけるIDP - 先住民を取り巻く可視性や多文化主義の考え方とは異なる、文化や移動をめぐる別の考え方が浮かび上がることが期待される

## 2. 研究の目的

本研究は、人類学における同時代社会の批判の試みである。具体的な対象は、コロンビア共和国で内戦の影響によって都市部に避難民として暮らす先住民エンベラで、彼らが直面する社会状況を通して、先住民の生を特定の領域と結びつける社会制度化された多文化主義について考察する。半世紀近く続いてきたコロンビアの内戦では、非合法武装勢力支配が長らく続いた地域と、首都圏などで被害状況に偏りがあり、先住民の諸集団は、「強制的避難移住 *desplazamiento forzado*」を含め、多様な被害にあってきた。集落を一度は離れ都市部に移住した先住民も、そこで直面するさまざまな困難ゆえに、さらに別の場所への移動を模索している。彼らが思い描く、過去・現在・未来の期待などを考えるは、伝統的領土には住まない先住民を「絶滅途上にある」と見立てる多文化主義を批判的に考察する手掛かりとなりうる。先住民たちの経験、活動を明らかにするだけでなく、それらから、かれらをマイナーな立場に位置付ける、さまざまな社会的想像力とは異なるものを引き出すことが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究の主な方法は、コロンビア太平洋岸に位置する都市部で国内避難民として暮らす先住民のもとでのフィールドワークや聞き取りである。被害者団体に参加する人びとの移動経験を含めたライフヒストリーに関する聞き取りをはじめ、団体による活動への参与観察のほか、都市部での日常について調査を進める。そのほか、地方都市で活動している、被害者支援にあたるさまざまな団体の訪問も行なう。

現地調査におけるひとつの論点が、国内避難民に対する公的支援である「帰還」に対する評価である。これは、紛争被害によって故郷を離れた先住民たちが、もともと暮らしていた場所に戻ることを支援する方策である。コロンビア国内では、先住民は伝統的領土に対する権利を有しており、その権利が認められた土地はレスグアルドとして認定される。伝統的領土で再び暮らすことを支援する「帰還」は、文化的差異を空間の区分に落とし込むことで多文化状況を許容する、多文化主義的な地理的想像力に基づいているといえる。これに対して、避難民となった先住民た

ちがどのように考えているのかが、重要な調査事項である。

(2) 本研究のもうひとつの方法が、先住民に限らず、コロンビア国内における避難民をあつかった、エスノグラフィーや質的調査に関する文献調査である。本研究計画を立案するためにおこなった予備的な下調べにおいて、被害者団体に簡単な聞き取りを行なった際に伝えられた団体の活動目的のひとつが、自らの「可視化」であった。2011年に、コロンビアでは武力紛争の被害者支援のための法律が制定され、登録制度なども確立されているにもかかわらず、なお「可視化」が必要であると考えられていたのである。そこで、そもそも、コロンビア社会において国内避難民はいかに「可視化」されてきたのかが問われるべきだと考えた。そこで、IDPの姿が描かれる質的研究を比較検討することにした。

#### 4. 研究成果

##### (1) IDPの可視性について

法制度の変遷に関する法社会学的研究から、さまざまなエスノグラフィー、コロンビアにおけるIDPの人類学的研究などをサーベイと分析的読解をもとに、コロンビアにおけるIDPの先住民の可視性の社会的変容をまとめた。

IDPが統計的に把握されるようになるのは80年代後半だが、その深刻さが社会的に知られてゆくのは、90年代後半とされる。それ以降、法的制度では、97年のIDPを支援対象とした「IDP法」(法律387号)の制定にはじまり、2000年代の憲法裁判所の判断、2011年の「被害者法」の制定によって、IDPの権利が拡充されていった。法的制度には、時代を下るにつれてIDPの可視性が改善されるという傾向がある。それにもかかわらず、それ以外の社会的脈絡では、IDPを被抑圧的立場に押し込めるような、ひとつの可視性が持続している。それが、二面性を備えた人物として、あるいは、潜在的な嘘つきとしてIDPを浮かび上がらせる可視性である。これは、市民が戦略的に攻撃対象とされてきたコロンビアの国内紛争において主要な暴力機構のひとつであった民兵組織の「治安維持」的想像力に由来するものである<sup>1</sup>。この想像力は、IDPがどのような人物であるのかを一方向的に画定する点で身元特定のであると同時に、その人物は、想定される隠れた顔のために窮状に置かれているのである、という憶測を呼び込むものである。IDPについて、その人が誰であるのか知るよりも、その境遇がもたらされたのは自業自得であると見なすよう、想像力を導く可視性が、かたちをかえながら、さまざまな社会的状況で適応されていることを明らかにした。

##### (2) 抑圧的空間としての都市

(1)のようなIDP像は、本研究の主たる調査対象であるIDP先住民にも無縁ではない。地方都市で暮らすかれらには、ときに、「偽IDP」だというレッテルも貼られてきた。被害者団体を組織する以前には、レスグアルドの代表者となる伝統的政治機構からも、そのようなレッテルを張られるということもあった。そこで、従来の伝統的政治機構には代表されない立場としての、IDP先住民という立場を確立することが求められた。

地方都市では、IDP先住民はさまざまな被抑圧的経験を重ねてきた。多文化的空間である都市における、非差別的経験、公共空間における軽視、都市内強制移住、暴力などである。そこには、都市を先住民的な生き方と相容れないものとする考え方が少なからず影響をおよぼしている。そしてコロンビアでは、たとえば、IDPとなった先住民に対する権利の保証を求める憲法裁判所による判断においてさえ、都市にいる先住民は「場違いの状態にある」とされる<sup>2</sup>。そして、IDP

先住民たちは、あたかも「場違い者」であるかのように扱われる経験を重ねている。他者によって「場違い者」と扱われるような経験は、人びとに様々なことを考えさせるきっかけにもなる。眼前の苦境について、今後の生について、そして、伝統的領土における忘れがたい被害的な記憶がふと回帰するといった、思い悩む体験が積み重ねられている。

### (3) IDP 先住民の代替的地理的想像力

IDP 先住民にとって都市は(2)のような空間である。そうであるがゆえに、かれらは被害者団体を組織し、自らを「場違い者」とは異なる仕方でも可視化することを試みている。たとえば、伝統的文化とされる踊りを IDP コミュニティ内で行なうワークショップを進め、地方都市のイベントで伝統的装飾品とされるピース飾りを販売し、ときに、伝統的な身体装飾をして街に出る。さらに、個人で訪れたときには十分な対応がなされない行政部局には、グループを組み訪れるなどの工夫をする。そのなかで、被害者支援にあたる行政部局と交渉し、IDP 先住民だけが対応される特別な機会を設けてきた。都市にしながら、同化していくことのない先住民として、自己呈示を重ねている。こうした都市における本質化は、「同化」やそれと結びつくコロンビアの多文化主義的な想像力とは異なる、地理学的想像力と結びついている。

被害者団体のもうひとつの大きな活動目的は、「帰還」とは異なる支援、「再定住」を求めることにある。「再定住」とは、レスグアルドでも都市でもないところに生活の空間を求めることである。これは、すでに権利の認められた空間には戻らないため、これまで先住民の生活領域ではない空間をそのようにすることを求めるということである。

コロンビア国内では、「辺境」がいかなる場所であるのかをめぐる伝統的地理的想像力が強く働いてきた。それによれば、「辺境」とは国家の存在感がぜい弱で、その代わりに、経済発展の余地を残す地理的空間である。「辺境」をおもな舞台としてきた武力紛争も、この枠組に収まる仕方でも展開してきた<sup>3</sup>。レスグアルドではないところを新たに先住民の暮らしの場とするよう求める「再定住」の要求は、「辺境」を経済開発が進展しうる空間としてではなく、先住民的生が拡大可能な空間として扱うように求める要求と言える。つまり「再定住」の要求には、多文化主義的なものとも、伝統的なものとも異なる地理学的想像力がはたらいており、それは、辺境をもっぱら経済活用のみに関わってきた植民地主義的傾向とは真逆の脱植民地的傾向性を備えたものと評価できる。

### (4) 先住民的な生のためのミクロな空間構築

(3)のような希望を持つ IDP 先住民たちは、「同化」的想像力とは反対に、都市での生を捨てたまま、これからも先住民として生きようとしている。実のところ、(2)にあげたような、見た目の操作以外の点でも、都市において依然として先住民として生きていることは確認できる。それが、植物の移植によるミクロな空間構築である。IDP 先住民たちは、家屋のまわりのせまい空間に、イモ類や果樹、あるいはさまざまな有用植物を植えている。それらは、レスグアルドでの生活において用いられる植物である。都市近郊にある川岸や、郊外の山などから、あるいは、都市の農産物市場から、レスグアルドに暮らす親族から、それらの種を集め、家の周りに移植することで、都市空間内部に森と連絡されたミクロな空間をつくりだしている。この空間構築は、IDP 先住民たちが都市に移住する前にレスグアルドでも行なっていた空間構築と同様であるが、都市において同様のことを反復することによって、都市における先住民的な食や健康を、部分的にであれ、可能にしている。社会環境によって、文化/生活習慣が上書きされるとする「同化」的想像力とは反対に、文化/生活習慣が、その生を取り巻く環境を変えている。

都市のニッチに植えられた、それら植物はまた、再定住が実現されたときには、新たな生活領域に持ち込まれるものとして、位置づけられている。都市のニッチに植えられたそれら植物は、移住先でこれから構築されるはずの菜園の「種」でもある。

以上の四点の研究成果から、IDP 先住民の活動と生には、領土と文化を一体のもの、そして固定されたものとみなす、コロンビア的多文化主義に対する批判的ビジョンが潜在していることが明らかになった。

## 文献

1 Castillejo Cuéllar, Alejandro. 2016. Poética de lo otro: Hacia una antropología de la guerra, la sociedad y el exilio interno en Colombia. Universidad de los Andes, Facultad de Ciencias Sociales, Departamento de Ciencia Política. Bogotá: Colombia.

2 Auto 004/2009 Corte Constitucional de Colombia

3 Serje, M. 2012 El mito de la ausencia del Estado: la incorporación económica de las zonas de frontera en Colombia. *Cahiers des Amériques latines* 71:95-117. Open Edition Journals. <https://doi.org/10.4000/cal.2679>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 近藤宏
2. 発表標題 国内避難民をめぐる真偽の言説と可視化の効果
3. 学会等名 第43回日本ラテンアメリカ学会定期大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤宏
2. 発表標題 ロジャーのアマゾン、ケースメントのアマゾン
3. 学会等名 ワークショップ / 移動の文学、文学の移動マリオ・バルガス=リョサ『ケルト人の夢』を読む -多面体としての文学-
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 近藤宏
2. 発表標題 「フロンティア空間」と「境界に住まう者」：コロンビア、国内避難先住民の移動と闘争
3. 学会等名 第55回文化人類学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 近藤宏
2. 発表標題 「場違い」者と多文化主義：コロンビア太平洋沿岸部先住民避難者による 実践的批判
3. 学会等名 第54回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 KONDO HIROSHI
2. 発表標題 La movilidad de los desplazados indígenas y su potencia política en Colombia
3. 学会等名 LASA 2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 幡谷則子・千代勇一（編）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 上智大学出版会	5. 総ページ数 -
3. 書名 「二面性という周縁」『辺境からコロンビアを見る』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------